

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號四第 卷十第

行發日一月四年九正大

論 說

勞賃の經濟的及び道德的性質(一)……………法學博士 田島 錦治

酒の政府專賣と公益……………法學博士 神戶 正雄

鎌倉時代の家族制度(三)……………文學博士 三浦 周行

明治の米價調節(一)……………法學士 本庄榮治郎

經濟學不進歩の原因に就きて……………法學士 石川 興二

所得稅均等負擔の理想と實現(二完)法學士 汐見 三郎

時事問題

現代方便生活と社會の問題……………法學博士 戸田 海市

雜 錄

戰後の獨逸の勞働市場……………法學博士 山本美越乃

諸國行政統計書の梗概(一)……………法學博士 財部 靜治

手形交換所制度論(二)……………法學士 大森 研造

經濟學不進歩の原因に就きて

石 川 興 二

現代經濟學界の第一人者を以て目せらるゝアルフレッド・マーシャル氏は、其大著經濟原論の初めに於て「斯くの如く人類の幸福に重大なる關係を有する諸問題を取扱ふ科學(經濟學)は……今や充分なる發達を遂げ成熟の域に達したるならんと考へらるれども……事實は之に反し、斯學は未だ尙殆ど幼稚の域を脱し居らず(still almost in its infancy.)」と道破してゐる。¹⁾

余が經濟學の研究を始むるに當つて、第一に驚かされたことも斯學が學として未だ如何に不完全なるものであるかと云ふことであつた。一體經濟學の認識目的は何であるか、斯學の研究すると云ふ經濟現象とは何であるか、斯學の部門は如何に分たれ而して各部門の意義は何であるか、諸の根本概念は如何に定義せらるべきであるか。斯る種類の諸問題は總て斯學の基礎を成すものであつてそれが解決せらるゝことに依り斯學は始めて一個の學としての形體を成し、眞の研究は茲に始まることを得べき性質のものである。然るに之等の問題は未だ充分に決する所なく又容易に決せらるべくも見へぬのである。而も「さる問題は最初にして最後の問題なり、斯學研究の最後に於て解かるべきものなり」とは屢々我々が聞くところである、是實に大なる矛盾に非ずして何であらう。而してこは恐らく何人も一度は陥らざる可らざる懷疑なのである。只各人に依りて異なるところは、此壓へ難き矛盾懷疑の念を強いて抑壓し之等根本問題は研究の最後に解かるべきも

1) Marshall; Principles of Economics. p. 4.

のなりとし其不確定を顧ずして研究を進めんとするか、或は此懷疑の思を徹底せしめて以て根本的の解決に進むべきであるとするかである。斯る有様なれば斯學進歩の幼稚なるは云ふまでもない。

於茲我々は斯學の眞の研究を進むる爲めに、先づ第一に斯學不進歩の根本的原因の何なるやを明かにせねばならぬ。斯學研究の當初に於て上述の二態度の何れをとるべきかも亦此原因の如何に依り決せらるべきものなのである。而も此斯學不進歩の根本原因の何なりやと云ふことに就いては、大學者の間にも尙誤解を存するが如くであつて、未だ明確に決定せられざるところである。

斯くして本論文の主たる目的は、第一に、斯學不進歩の根本原因に關する一般の論を考察し、第二に、斯學は其認識方法に於て如何なる欠陥を有するか、而してそが斯學の進歩を如何に妨げつゝあるかを明かにし、第三に、此認識方法上の欠陥が、斯學不進歩の最大原因なることを論斷せんとするのである。余は此目的を達するに、多くの人々には空虚なる符號とも見らるべき哲學的術語の使用を出來るだけ避け、自己經驗の實感に訴へて論を進めたいと思ふ。是、此哲學的術語の使用と云ふことが、斯學の斯る重要問題の解明を妨げし有力なる原因の一つであると思はれるからである。勿論斯る問題に於て認識論的考察を全然除外することは不可能である。本來人間の智識は一體であつて、一の學は常に他の學の智識の力を俟つて初めて完きを得るものである、況して學の學たる認識論に於ておやである。各の學は専ら其學本來の智識以外に出づ可らずとするは所謂學問の極端なる分科主義の誤謬に陥れるものである。

一の學問の不進歩の根本原因が何なりやと云ふことが問題となる時に、我々の多くは其原因が斯學の認識者又は研究對象の孰れかの事情にあると云ふことを、自明の事であると考へるのである。是我々は一般に、各々の學問には各それ自身の本來の研究對象が存在し、學問の別は此對象の差異に基くものであり、而して各の學問の目的は此對象を認知するにありと考へ、從て學問の成立要素は此對象を認識する認識者と、此認識者が認識する對象との二つであると考ふるからである。マーシャル氏も前掲の語に引續き特に斯學不進歩の主要原因を論じて同じくこの二つの事情に歸してゐる。即ち氏は、先づ、斯學が人生の高尙なる福祉に重大なる意義を有することが、人々に氣付かれざりしが爲めに、有能の才が多く斯學の研究に集まらざりしこと、次に、斯學の研究對象たる經濟社會は其變動大なりしが爲めに各時代の研究者は前時代の研究の結果を自己の研究に利用するの便宜少なりしことを擧げてゐる。福田博士も亦この説を是認し主張して居らる。²⁾

是また斯學不進歩の原因を、斯學の認識對象と認識者との事情に求めんとするものである。即ち今日まで深く我々の認識觀念を支配し來つた考へは所謂模寫主義的思想であつて、物を知り眞理を知ると云ふことは、外界に存在するものを鏡に寫し取るか如きものであると考へてゐるのである。從て學問と云ふ認識の成果の如何に就いても亦此鏡に相應すべき認識者と、鏡に對すべき物體とも見るべき認識の對象との事情にあると考へらるゝに至るのである。

然し我々か批判的となる時は、斯る認識觀念は、到底之を保持するを得ざるもので、哲學上に於てはカントに至つて徹底的に破壊せられ、新に構成主義の認識論が打ち立てられ始めて眞理及

2) Marshall; Principles of Economics pp. 4-5.

3) 福田徳三博士、改定經濟學講義、第一卷七一―九頁同、六五頁

認識の本質が闡明せられた。即ち構成主義に於ては認識することは單に經驗界を模寫することではなくして加工(Verarbeiten)することであり、従て學問の差別は對象の差別によるにあらずして寧ろ此同一經驗界を加工する方法即認識方法の差異にあることが明にされた。此認識觀念の模寫主義より構成主義への變遷は總ての學問的認識の問題に根本的影響を與へることとなつたのである。斯くして學問的研究には認識方法の問題が新に重要なものとなり、各學問には各獨特なる真理があり、また認識方法に關する問題があることとなつた。模寫主義に於ては認識は模寫にあるを以て認識方法そのものは此際に於ける程重要な問題ではなかつたのである。

於茲斯學不進歩の根本原因の考察に於ても、前掲の斯學の認識者及認識對象の事情の外に普通に餘り考慮せられざりし此斯學認識方法上の問題に就きて特に考慮を用ひねばならぬこととなつたのである。而して余は斯學不進歩の根本原因は寧ろ此認識方法にありと考ふるのである。

二

斯學の認識方法上の問題と云へば、我々は直に正統學派の演繹法と、歴史派の歸納法との對照を思ひ浮べ勝ちである。然し此二方法は何れが誤り何れが正しと云ふべきものではなく、共に缺く可らざるものであることは、既に確定されたところであつて、今更問題にすべきことではない。余が茲に認識方法上の問題と云ふは、前述せしところに依りても明かなるが如く、認識論上の構成主義に依り認識作用の本質が新に闡明せられしことより起り來るものである。依て先づ認識作用の本質に就き一言して然る後論を進めやう。

總ての學問の求むるところは眞理の認識である、而して學問は眞理を研究するものであるとか云ふが如き時の眞理の意味は「余は斯く思ふ」と云ふが如き獨斷や、「恐らく斯々ならん」と云ふが如き憶測とは反對に「何人も必ず斯く考へざる可らず」と云ふ眞理を意味してゐるのである。何となれば憶測や獨斷ならば各自に放任すべきことであつて、多くの人が協力して研究することは無意義であり、從て初めから之に就いては學問と云ふことは考へられぬからである。されば眞理を認識すると云ふことは或思想を「何人も必ず斯く考へざる可らざる」ところのものとなりと斷定することであつて、其作用は今日の認識論に於て論ぜらるが如くに判斷作用でなければならぬのである。(リツケルト氏は其名著『認識の對象』の第三章に於て、眞理を認識すると云ふことの本質は表象作用ではなくして、單なる表象關係を肯定又は否定することであり常に何等かの價値に對してなす判斷作用であると云ふことを詳論してゐる。)而して、論斷の眞ならんが爲めには充分なる論據あらざる可らずとは論理學の根本命題である。

されば經濟學上の總ての論斷も亦充分なる論據を必ず有せねばならぬことは云ふまでもないことである。然るに今斯學の實狀に就いて之を見れば、斯學はこの論斷の論據を自身に於て、大なる缺陷を有してゐるのである。

經濟學の理論の實際に就いて第一に驚かざるゝことは、其論斷が無視され又は明かになつてゐないことが事實上屢々なることである。是模寫主義的の誤謬に捕はれて認識即ち判斷なることを明かに意識せざるに依るのである。

次に、斯學の論斷の論據の多くは、假令一見複雑壯大に見ゆるものにあつても、之を詮じ詰めて見れば多くの場合次の三種のものに歸するのである。即ち(一)從來の學說、學問上の仕來りを以て論據とせるもの、(二)認識者の單なる主觀的事實を以て論據とするもの、(三)所謂客觀的事實又は實社會に於ける用語例等を以て論據とするもの即ち之である。余は以下之を吟味して見やう。

(一)從來の學說、學問上の仕來りを以て論據とすると云ふは、或事が從來の學說又は學問上の仕來りであつたと云ふの故を以てそれを眞理なりと主張せんとし、又は逆に或る主張をそれが從來の學說又は仕來りでないと云ふ故を以て誤りなりと主張せんとするものである。而して此傾向は事實根本概念の定義又は分類部門の編成等斯學の基本問題に近い程特に多く見らるゝのである。

而して、其最極端なるは、從來の習慣を頭から當然のこととして無批判に受入れんとするものである、此際之等の人は、此等のものを變更することは經濟學其ものを破壊するものと考へらるゝ。然し經濟學が經濟學として存立する根據は斯る點にはないのであつて、それは只所謂經濟學のアプリオリにあるのである。經濟學に於て變へることの出来ないものは只々此アプリオリである、これを變ずれば經濟學全體が破壊されてしまふが他の點の變更は何等斯る結果を齎すものではない。又少しく考へて見ると事實之等の基本問題は決して議論なきものではない、故に之等の問題に關して傳習を無批判に受入れんとすることが先づ第一の誤りであり、之が經濟學不進歩の大原因である。

次に假令斯くの如く無批判に盲従することなく之等の問題に就き論ずる人にあつても、其議論

は從來の學說等を探究例擧するに力を用ひ、其論斷は、多數決に依り或は其說の主張者が有名な學者である等要するに從來の學說であるを云ふ以上に有力なるものでない場合を屢々見るのである。

然し Stein を幾ら寄せても其から Solten は出て來ない、從來の學說であつたと云ふことはどこまでも單に學說であつたと云ふに過ぎぬ。學說を眞理であるとするには他に十分な理由がなければならぬのである。斯くて從來の學說とか仕來りとか云ふことは、如何なる場合に於ても眞理の論斷の根據となることは出來ぬ。

斯くして傳習的論據の誤謬は、之等根本問題を決定し能はざらしめたることに依つて斯學の不進歩を來したるのみならず、之等の問題が斯學の根本問題であつたと云ふ點よりして斯學全體の不進歩の大なる原因をなしてゐるのである。

我々は又經濟學史上に於て、此顯著なる事實を見る。それはアダム・スミスに出でマルサス、リカルドを経て非常な勢を以て隆興し來つた、正統學派の凋落の運命に於てである。

正統學派は澤澤法を重要視したが演繹法そのものは正しきものであつて、此派の凋落の因をなすべきものではなかつた。只此派の後繼者が其演繹法の前提條件として、先輩がとりしどころのものを單に傳習的に遵奉せし所にこそ、正統學派凋落の原因は存するのである。總ての社會の制度習慣を、當時の最進歩せる産業都市のそれの如くに倣看せしこと、總ての人の性質を、各自常に自己の利益を求めて自由に且速に行動する經濟人と看做せしこと等は、即是である。之等はス

ミス殊にリカルト等が當時の最進歩せる都市の事實經驗よりとりて以て演繹法の前提とせしものであるが、其後繼者の多くは此前提を無批判に傳習遵奉し、之を以て恰も斯學研究の絕對的基本條件なるが如くに思推し、時と所との異り従て實社會の事情の異り來れるにも拘らず、此同一前提より演繹することに専ら努めて、殆ど其前提を其異れる時と所との事實經驗に徴することを忘却した。於茲所謂正統學派の Perpetualism 及 cosmopolitanism を來し、斯くて斯學の理論は實社會の實狀と甚だ懸隔することとなり、實人生に役立つこと少きものとなつた、斯くて、さしもの正統學派も遂に凋落の運命に會し、歴史派が其缺點を指摘して立つこととなつたのである。之傳習遵奉的精神が斯學不進歩の原因を爲せし經濟學史上に於ける最顯著なる事實である。

(二)次に單なる認識者の主觀的事實を以て論據とすると云へるは、或事を自己にとつて自明の理であるとか又は自己の確信するところであるとか云ふが如き理由を以て眞理なりと主張するのであるに clear and distinct なるものが眞理なりとする認識論に所謂 Evidenz theory に相當するものである。即ちは次に述べるところのものとは反對に偏主觀的の論斷である。而してこれは根本概念の定義等について事實屢々見られるところである。

眞理とは前述せし如く「何人も必ず斯く考へざる可らざる」ところのものである故に斯る論據を以て眞理の論據とす可らざることは云ふまでもない。

此に關しても亦我々は、斯學發展の階段に於ける顯著なる事實を見る。其は今日將に興らんとしつゝあるところの文化科學として經濟學を確立せんとせる努力に於てである。我々は茲に、既

存の經濟學を充分に顧慮することなく、従て經濟學と云ふ既存せる學の革新と云ふよりは寧ろ新に經濟學なるものを打建てんとするが如き、獨斷的の努力の爲されつゝあることを見るのである。此事は此努力其もの、價値を損するのみならず、今や茲に無用なる論争を惹起して斯學不進歩の一因を成さんとしてゐるのである。

(三)次に所謂事實又は實社會に於ける用語例等の客觀的事情と考へらるゝものを以て論據となすと云へるものは、第二のもの、偏主觀的なるに反し、偏客觀的の論據である。

其中社會の用語例を以て其主張の論據とせんとするものは、經濟、資本等斯學の根本概念に關して事實上屢々之を見る。而して或人々は斯學の根本概念は總て實社會の用語に従はざる可らずとさえ云ふのである。されど第一に實社會の用語例なるものは一定せるものではない。次に又我は斯學其もの、爲めに斯學の根本概念を求めてゐるのである。社會の用語をとつて斯學の概念とするには別に其だけの十分な理由がなければならぬ。而も斯る誤謬の爲めに、無用な論争に貴重な努力が浪費せられ、而も今尙概念の決定が曖昧にされてゐることは少くないのである。

然し偏客觀的論據の中、最重大なるは所謂事實を以て論據とするものである。此もの、根本思想は所謂模寫主義的の考へに根ざしてゐるのである。此考へは根本概念の定義其分類、其他法則の研究等の場合に於て最多いのである。

こは如何にも絶對的決定的の論據に違ひなく思はれる。「火が熱い」と云ふことの眞理なのは只火が熱いから熱いのである。熱いと云ふことが事實だからである、之以上論據も何もない之が唯

一の而して絶對窮極の論據ではないかと思はれる。されば事實經濟學の多くの論斷の、最有力な而して最根本的なる根據と考へらるゝものは多く斯る考へに立つてゐるのである、而して普通、其等の論斷を聽く者も事實であると云ふ論據はこれを疑ふ可らざるものであると考へ、從て其論を尤もとして承服するものである。是、此模寫主義的認識觀念は、現に深く我々の常識を支配してゐるものだからである。されば又斯學認識方法上の此模寫主義的誤謬を打破することより以上に現代經濟學の進歩にとつて重要なることはないのである。此篇めに余は先づ智的に我々が事實と云うて居るものゝ性質を少しく考へて見やう。

本來我々が直接に經驗してゐる具體的事實は極めて豊富なものであつて、我々の智識は到底其儘に此事實を取入れることは出來ないのである、即ち我々の智識に於て事實と云うてゐるものは、單に選擇的に一の具體的事實の一性質、一方面を取つたに過ぎぬ、されば其選擇次第により一の具體的事實に就きて、無數の概念的事實又は事實的概念とも云ふものが出來るのである、例へば一輪の花に就いても「此花は赤い」と云ふも事實であると共に「此花は丸い」と云ふも「此花は美しい」と云ふも「此花はよい香がする」と云ふも亦事實である。我々が此花に就いて、一事でも云ふ時は既に具體的全體を離れて單に其中の何れかを選択してゐるのである、されば事實であると云ふことは我々が普通考へてゐる様に、唯一絶對的なそれ自身確定的なものではなく、我々の選擇次第で變る相對的な頼りないものである、故にそれ自身が獨立して論理の窮極の根柢となること云ふことは出來ないのである。尙此誤謬を二三の例に就いて明かにして見やう。

(イ) 概念の分類及其例擧に就き、從來の經濟學書に就いて見るに、無批判に仕來りに服従せんとするものも少くないが、又屢々單に或概念例へば財が事實上多くの種類に分類することが可能であると云ふだけのことを以て、此多くの事實を寫して多くの分類を例擧し、以て斯學の認識目的が達せられ其眞理が殖へたものであると考へてゐるらしいのである。然し或同一の對象は種々なる觀點より種々に分類せらるゝが、其中經濟學の分類となるものは、只經濟學に必要なもののみである。此ことに氣付かない爲めに、斯る無用の分類の例擧が事とせられ、又屢々之に關する無用なる議論に、貴重な研究の力が徒費されたのである。而も斯學には斯る類の無用の論が少なく、殊に歴史派に於て多くこれを見るのである。

(ロ) 殊に此模寫主義的の考への著しく現はれてゐるのは經濟現象の考察に就いてである。即ち經濟學の對象たる經濟現象は、經濟現象として認識者より獨立に外界に存在し經濟學は之を寫しるのであると云ふが如くに屢々考へらるゝのである。

然し斯る考へは果して保つことが出来るであらうか。人間と云ふ同一のものが同時に動物學の對象ともなり、醫學の對象ともなり、倫理學又は經濟學の對象ともなり、而もそが異つた現象として現はれることを考へて見れば、斯る模寫主義的の考への保つ可らざることには直にわかるであらう。即ち總ての經驗的科學の對象は同一なる此經驗界であり、こは種々なる立場より見らるゝことに依つて種々なる科學對象として現はれるのである。斯くて模寫主義的の考へが、最よく保持せらるゝと考へらるゝ、此際に於ても亦其は誤謬であり、而して此誤謬が經濟學現象の決定を困難

ならしめ斯學の進歩を害したことは少くないのである。

(ハ)次に法則に就いて述べやう、先に述しは多く斯學の基礎問題についてあるが、斯學本來の研究目的の一とする此法則の研究に就いても亦同様の誤謬に陥つてゐるのである。

或人々は考へるであらう。此法則こそは事實其儘を寫し取るのであつて、何等他の價值標準の加はるべき餘地はないと、如何にも此場合には左様に思はれる。然し少しく考へて見ると、第一斯る法則が經濟法則として採用せられる處に既に何等か、所謂事實以外のものが働いてゐるのである。

次に此ことを暫く度外視しても果して容觀的事實のみに依りて一の法則が正しく論斷せらるゝであらうか。

經濟法則と云ふはマーシャル氏の云ふた様に a statement that a certain cause of action may be expected under certain condition from the member of a social group. であり又 The term law means nothing more than a general proposition or tendencies more or less certain, more or less definite. である。即ち經濟法則の本質は under certain condition に於ける a general tendencies more or less certain を表はすものであることは何人も多く異存はあるまい。然るに此條件 (condition) と傾向 (tendency) とは密接な相關關係を有してゐて、條件を少くして實際現象に近くすればする程傾向は不確實となり、條件を多くして實際現象に遠くすればする程反對に傾向は確定的となつて來るのである。若し或人々の考へらるゝやうに經濟學が出来るだけ普遍的の法則を發見することが

目的であるならば條件を出來るだけ少くすればよいのである、例へば人間の行動の動機を現實を離れて、單に利己的欲望より行動するものとするならば、最簡單正確なる機械的法則の如きものが得らるゝこととなるのである。然し其は現實の經濟現象を説明するには甚だ役立たぬものとなつてしまふのである。然らばさて其條件を次第に現實に近づければ其傾向は次第に不確定なものとなり、遂に一法則として存立するの價値なきに至つてしまふのである。

こゝに於ても亦單に客觀的事實と云ふことは真理の標準、論斷の根據となることは出來ぬのである、而も此ことが充分に意識せられざりし爲めに屢々無用の論議が事とせられ、又研究し論定決定せられし法則が價値少きものとなつたことが少くないのである。而も法則は斯學の本來の研究目的の主なるもの、一つであり従て斯學の進歩は此點に大いに阻害せられたのである。

我々は又此偏客觀的模寫主義的の誤謬、を經濟學史上の顯著なる事實に於て見るのである。其は正統學派を難じて昇天の勢を以て隆興し來りし歴史派の運命に於てある。其消息は正に茲に法則に就き述べし所に依り明かにされる。即ち正統學派は前述せし如く人間を經濟人と看做し社會の制度習慣を變動せざるものと考へし結果、其學理は全く普遍的法則に近きものとなり遂に實人生に縁遠きものとなつた。歴史派は即ち之を不可なりとして特殊の事實、經驗を強く重じたのであつた。然るに其結果は正統學派と反對の弊に走らんとする傾向を生ずるに至り、此派の或人は學問の要は實事を有のまゝに模寫するにありと考へ、經濟行爲に關する法則を全然否定し、斯學の科學としての性質を大いに損じ、全然事實の記述統計を事とするまでに至つたのである。

是また偏客觀的誤謬が斯學の進歩を阻害せし經濟學史上に於ける顯著なる事實である。而して今やかつて歴史派の全盛時代も亦過去に屬することゝなつたのである。

扱以上論明せしが如く傳習的偏主觀的及偏客觀的論據は、現に斯學の論斷を誤ることによつて斯學の進歩を甚しく阻害しつゝあるのみならず、又之を其の學史上に見るも正統學派歴史派の二大學派及び正に與らんとする文化科學派の運命を危からしむることに依つて斯學の進歩を大いに妨げたのである。然らば之等三種のものにあらずして、眞に斯學の眞理を確立すべき論據となるべきものは何ぞやと尋ぬる時、そは現代の經濟學界に於て今尙明確になつてゐないのである。

彼の「富とは何ぞや」又は「經濟とは何ぞや」と云ふ如き、斯學の研究對象の特徴を明かにせんとする問題は、其解決に依りて決して余が茲に提出せし斯學の認識方法の問題の全部を解決すべきものではないが、而も斯學の諸問題中此問題の解明に對して最縁近かりしものである。然るに此等の問題の論せらるゝ時に於ても亦以上述べ來りし認識方法上の諸誤謬が、他の諸問題に於ける場合と全く同様、否一層著しく爲されたのである。特に此際に於て最多く見らるゝ誤りは、全論據を無視し、其充分なる論據に依りて首肯せしめられたことではないのである。斯くして我經濟學論斷に就き、其充分なる論據に依りて首肯せしめられたことではないのである。斯くして我經濟學は何處々々までも認識方法上の缺陷に災されてゐるのである。

斯學の多くの論斷が斯くて味だ其充分なる論據を有せざる結果は、其論斷の多くがそれ自身充分に斯學の眞理を確立するに足らざるのみならず、其各は無力にして他を承服せしむるに足らざ

るを以て、諸種の問題に就き異説は更に異説を生み紛々として決するところもなく、多くの根本問題すらも今尙解決されず、先人の研究の結果を利用し、同時代の學者と協力し以て斯學の研究を大いに進捗せしむることも出来ない有様なのである。

三

マーシャル氏が斯學不進歩の最大原因を認識者と認識對象との事情に求め、而して之が又最普通に通に考へらるゝ所であることは前述せし如くである。

然し學問全體は個々の認識の成果の堆積である。故に假令認識者が如何に有能であつても亦其研究對象が如何に不變であつても認識方法を誤つてゐては、學問の進歩の到底不能なること、恰も如何に足は達者であつても誤れる一歩々々を行くものは、遂に目的に近づき之に到達することが出来ぬと同様である。之に反して假令有能なる研究者が少數であつて、又時に研究對象が變遷することがあつても、其認識方法さへ正しくば其研究は絶へず進歩發展して完全の域に近づくこと、恰も足弱きものもよく目的を知り正しき一歩々々を進む時は次第に目的に近づき遂にこれに到達し得るが如きものである。即ち一の學問の其認識方法に缺陷のある時は、其缺陷は其學問の認識の對象及認識者の能力に於ける事情よりも遙に重大なものであつて、實に學問進歩の最大缺陷となるのである。

然るに今之を現代經濟學に就きて見るに、其對象たる現今の經濟組織は、前代のものど全然其本質を異にするものではなく、且其成立せしよりも既に百數十年を経てゐる。又其學者にあつて

もアダム・スミスの大著出しより同じく百數十年、其間各時代の俊才亦少からず、更に近年に到る程多くの俊才は斯學の研究に集つた。然るに他方其認識方法の不完全なることは實に前述の如くである。

於茲余はマーシャル氏及一般の考と異なり、經濟學不進歩の最大原因を此認識方法上の缺陷に歸せざるを得ないのである。

四

若し現代經濟學不進歩の根本原因が、斯學の研究對象の變動し易きことにあつたならば、これ斯學の運命にとりて重大なることであつたであらう、何となれば斯學の對象たる經濟社會は將來も變動して止まないものだらうからである。而して吾人は此事が斯學不進歩の原因なればとて、此社會の變遷を抑止し此斯學不進歩の原因を除去すると云ふことは出來ない。

又若し斯學不進歩の根本原因が、斯學の研究に従事する學者の能力の不充分なることにあつたとせば、是亦斯學の爲めに悲しむべきことであり、同じく容易に除かるべき原因ではない。

然し吾人は幸にして、斯學不進歩の最根本的原因は、經濟社會の變動でもなく、又學者の能力の不充分なることでもなくして、斯學の認識方法上の根本的缺陷にあることを明かにしたのである。此認識方法上の缺陷は、前の二者とは全く事情を異にして、我々の努力に依つて、除去し得らるべきものなのである。而して、一度正しき斯學の認識方法が確立せらるゝならば、其は斯學研究の共同的財産であつて、各人は其能力の優劣如何に拘らず之を利用し得、又利用せねば

ならぬのである。それは恰も利器が巧みなる工人にも亦巧みならざる工人にも同様に有用であり必須であると同様である。又此認識方法の根本なるものは經濟社會が變動すればとて變ずるものではなく、常に斯學の認識方法として役立つべきものである。こは前述せしところにより明なるが如く、常に斯學の眞理成立の根源となり、斯學の對象を成立せしめ、斯學を斯學として成立せしむる所以のものだからである。

されば我々は斯學の眞の進歩の爲めに、一日も速かに此認識方法上の缺陷を救済せねばならぬ。然らば我々は如何にして此缺陷を救済し得るであらうか。或人々は云ふかも知れぬ、斯る認識方法又は眞理の標準の問題は假令曖昧であつても、我々が個々の問題を實際に當つて解いてゐる中に、自ら明かとなるものであるから、別個の問題として研究する必要はないと。されど個々の問題は本來眞理の標準に依り正しく判断せらるべき性質のものである、然るに判断せらるゝものが判断をする標準となるものを正しく決定すると云ふことは、不可能である。斯くの如くにして得られたと考へられるゝものは、今日見らるゝが如き單に常識のものに過ぎずして、學問的に正しきものたることは絶對にあり得ないのである。物の長さを計るに當り其標準となる尺度を定むると云ふことは、此計ると云ふことの前に決定せられねばならぬ別個の性質の問題である、勝手な尺度を定めて幾度、物を計つたとて決して正しい尺度は定まつては來ない。否此姑息なる仕方 の爲めにこそ、現に斯學は惱まされてゐること、上述の如くである。

於茲我々は此問題の解決の爲めに徹底的なる努力を拂はねばならぬ。而して此努力はリツケル

ト氏の所謂「認識論的懷疑」にのみ始まり只此懷疑を徹底せしめ行くことに依りてのみその目的に到達し得るものである。是人生心意上の問題が、只其懷疑を徹底せしめ行くことに依りてのみ眞の解決光明に到ると云はるゝと全く同様なのである。我々は常識的に何等かの認識方法を既に有し、(而して其多くは前述せし如く模寫說的認識觀念である)、而も之を信じてゐるのであるが故に先づ之に對して疑を懷かねばならぬ、而も曩に述べしが如く我々は斯學研究の初めに當つて必ず一度は此經濟學の認識論的懷疑に陷るのである、而して此懷疑を徹底して行く時、我々は今更に眞理とは何ぞや、認識とは何ぞやと云ふ問題にまで落ち行くのである。斯くて既存の模寫主義的其他誤れる認識方法を打破し終りし時、茲に始めて正しき認識方法の建立せらるべき素地が完成せられるのである。二個の物體は同時に同一空間を占むる能はずと云ふは物理學の根本命題であるが、正しき認識觀念も亦誤れる認識觀念と同時に存在することは出來ぬのである。而も此誤れる認識方法は久しき因習に依りて、深く吾人の内に根ざせるものなれば、其打破すらも亦容易な業ではない。

之を要するに斯學不進歩の根本原因は斯學の認識方法上の缺陷にあるのである。而してこの缺陷の救済と云ふことは現代經濟學の最困難なる且最重要なる問題で、また其性質上第一に解かれねばならぬ問題である。否斯學を學として成立せしむる基本は實に茲にあるものなればこの問題の解決せざる限り斯學は未だ嚴密なる意味に於て一個の學と云ふことすら得ないのである。洵に斯學認識方法上の缺陷を正さずして斯學の眞の進歩を冀ふが如きは其源を治めずして末の清からんことを望むものであつて、是所謂百年河清を俟つものにあらずして何であらう。